View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

保育者養成における身体表現教材「おもしろダンス」に関する実践報告

小笠原 大輔 [a]

[a] 湘北短期大学保育学科

【抄録】

保育者に必要とされる表現力を養うためには、養成校において自ら表現する楽しさや他の者の表現を感受する楽しさを経験しておく必要がある。そこで、ダンスの楽しさを充分体験できる教材「おもしろダンス」を用い、そこに創作的要素を多く組み込むことで、自分の表現や他者の表現、自己の気づきと他者の理解・コミュニケーションなどについての意識がどのように変化するのか、また創作すること・発表することに対してどう思ったかを質問紙により調査した。その結果、受講者のこれらについての意識は、授業のねらいに適った望ましい方へ変化し、また創作・発表に対して概ね好感を持っていることが明らかになった。

【キーワード】

おもしろダンス　半分創作　保育者養成　表現力

Ⅰ．諸言

保育者に必要な資質の一つとして表現力が挙げられる。この表現力はもちろん自ら表現する力（便宜上「出力」とも換言できる）であるが、それだけでなく幼児自身の表現力を育む（引き出す）力、そして幼児の表現を見逃さない、聞き逃さない力も身につけていなければならない。幼稚園教育要領解説[1]には「教師は…（中略）このような幼児の素朴な表現を大切にして、幼児が何に心を動かし、何を表そうとしているのかを受け止めながら、幼児が表現する喜びを十分に味わえるようにすることが大切である」とある。また保育所保育指針解説書[2]には「保育士等は、子ども一人一人の表現を受け止め、そのおもしろさや発想の豊かさに共感し、その工夫を十分に認め、子どもが表現することの楽しさを味わっていくことができるように」とある。従って、保育者に必要な表現力とは言わずもがな「双方向的な表現力」である。また相手の表現（相手からの出力）を感受する（相手→自分）という以外にも、小林（2014）が「表現力とは一方向的に発信するだけでなく、受け取る相手のことも考えるということ。言い換えれば、コミュニケーション能力」[3]というように、自分から相手に出力する（自分→相手）際にも相手のことを考えて行う必要があり、こちらの意味でも双方向的でなければならない。この双方向的な表現力を養うためには、ただ「流行りの曲に合わせてみんなで練習してみんなで踊ったから楽しかった」というだけでは不十分である。もちろん笠井（1991）のいうとおり、「保育者が子ども以上に創作ダンスを好きになることが先決であり、ダンスをすると楽しいと感じられればもうそれで十分である」[4] わけだが、筆者がこれまでダンス授業で用いてきた教

材「おもしろダンス」では、集団により多少の差異は現れるものの受講者の9割以上（ほぼ10割の集団もある）が「楽しかった」と答えており[5]、この教材を用いれば「ダンスを楽しむ」というダンス授業における大前提の経験は保障されるといえる。従って、今後の更なる学びの展開としては、この「おもしろダンス」に創作的な要素[註]をより多く組み込むこと（これを「半分創作」と称す）で、楽しさ経験のみに止まらず、自ら表現する力の向上を目指すと共に、他者の表現を見取る・読み取る・感じ取る力を養いたいと考える。養うに至らないまでも、これらを意識するという経験を積むことで保育者に必要な表現力向上の一助となると考える。

本研究は、筆者が2011年より取り組んできたダンス教材「おもしろダンス」に関する実践報告の続報である。今回は、本教材を体験することにより受講者の中で、自分の表現や他者の表現、自己の気づきと他者の理解などについてどのように意識が変化するのか、また創作すること・発表することに対してどう思ったかを調査し、今後の授業の更なる展開に繋げることを目的とする。

Ⅱ．方法

1. 対象

・A女子大学（以後、「集団A」と略記）
　前期授業「保育の表現技術C」受講者47名（1年生35名、2年生5名、3年生7名）。
・B短期大学（以後、「集団B」と略記）
　通年授業「幼児体育Ⅰ」受講者1年生65名（うち男子1名）。

2. 授業内容

筆者がこれまで実践してきた「おもしろダンス」[6]の内容及び方法とほぼ同じであるが、授業回数はシラバス構成上の都合により、集団ごと異なる。

・集団A：半期15回の授業回数のうち第8～10回目の全3回をダンスに充てた。
・集団B：半期15回（通年30回科目）の授業回数のうち第10～15回目の全6回をダンスに充てた。但し各授業時間の前半は鉄棒、後半はダンスというように、同一コマ内で2種目を行う回が全6回中4回あった。詳細は表1に示す通り。

[1] 導入と練習、中間発表

前半はウォーミングアップも兼ねて、二人組ストレッチや複数名でのからだあそびなどを行った。後半は、楽曲『ムスタファ』（アラブ民謡／歌と演奏：チャラン・ポ・ランタンと愉快なカンカ

表１　授業スケジュール

ダンス	集団A	集団B
1回目	[1] 導入と練習、中間発表	鉄棒／[1] 導入と練習
2回目	[2] グループごとに半分創作	鉄棒／[1] 練習、中間発表
3回目	[3] 準備、発表	鉄棒／[2] グループごとに半分創作
4回目		鉄棒／[2] グループごとに半分創作
5回目		[2] グループごとに半分創作
6回目		[3] 準備、発表

ンバルカン）を用い、筆者が振付を考えたダンスを受講生に振りうつしをし、覚えてもらった。受講生は6～10名程度でグループを作り、グループ毎に協力しながら練習を行い、最後にグループ毎に成果を発表し合った（中間発表）。

[2] グループごとに半分創作

1回目の授業で覚えた振付をベースに、曲の1番はそのまま踊り、2番はグループ毎に創作を行った。創作の手がかりとしては、使用曲と基本の振付は既に用意されているので、あとは〈新たに振付を考える（腕の振り方や弾み方、表情を変えるなどのアレンジ程度でも可）〉〈隊形と移動を考える〉〈掛け声を考える〉などである。〈テーマ〉と〈衣装・小道具〉に関しては、すぐに決める必要はない旨を最初に提示し、既に覚えた振付や自分たちで考えた動きを踊る過程で自然に閃いたものを採用するとよい、とアドバイスをした。これは、最初にテーマを考えるところからスタートすることによる動きの時間の縮小を防ぐ為と、「この動きが何に見えるか」といったようにイメージを膨らませる機会を阻害しない為である。

[3] 準備、発表

授業時間の前半は、グループ毎に最終練習を行い、衣装やメイクなどの準備時間に充て、後半に発表を行った。

3. 調査手順

初回授業終了後および最終回授業終了後に質問紙による意識調査を行った（集団A：第1回目と第3回目、集団B：第1回目と第6回目）。「踊り・表現および授業全体」に関する15項目は初回および最終回の2回調査を行い、「創作」に関する5項目と「発表」に関する5項目は最終回のみ調査を行った。尚、質問項目は原田（2006）の作成した「舞踊の感情昇華に関わるカテゴリーと質問項目」[7]を参考に筆者が追加・作成した。

同じ教材を取り扱ってはいるが、学年構成・授業形態の不統一はもとより集団の雰囲気や人間関係などをはじめとして、ありとあらゆる面での差異が当然存在することから、集団ごとに分けて統計処理を行った。岡本（2003）のいう通り「幼児教育科学生は、一般学生に比べると人と関わることにも積極的で、人前に立つことも厭わない学生が多い」[8]といった保育者養成科目履修者としての共通の傾向もあることから、今回は創作に関する質問5項目と発表に関する質問5項目に関して、二つの集団間の共通の傾向並びに差異の検討も行った。但し、結果に差異が生じた場合の因子は無限に存在すると考えられることから、その先の論の展開は行わないものとする。

全質問項目に対して、「とてもそう思う」5点、「まあまあそう思う」4点、「どちらでもない」3点、「あまりそう思わない」2点、「全然そう思わない」1点の5件法を採用した。統計的解析にはMicrosoft Excelを用いて平均値に対してt検定を行った。

Ⅲ. 結果および考察

1. 作品タイトルと内容

2集団14グループの作品タイトルとその内容を表2に示す。

全体的に配役のある作品が多かった。衣装も手に入りやすい物、お金をかけずに用意できる物を使用するよう推奨したこともあってか、手に入りやすい衣装（高校時の制服、エプロン、運動着など）のイメージから配役を考えるパターンも多くみられた。作品内容は多様であり、また振付や構成に工夫がみられる作品も多かったが、逆に振付や構成にほとんど手を加えずに、敢えて与えられ

表２　作品タイトルと内容

1. 海水浴	海水浴に行く女の子とライフセーバー。「暑いなー」「海行こうか!」の台詞から始まる。準備体操や泳ぐ動き、シンクロナイズドスイミング、カニ歩き、魚釣りなどをモチーフにした振付。
2. 合コン	女性役と男装した男性役。男性役の台詞から始まる。合コンでの出会いから始まり、男女のやりとり、駆け引き。男性が振られ続けるが、健気にアタックし続けた末、最終的には結ばれる。
3. そばかす	アキバ系アイドルと彼女を取り巻くオタク達。双方の雰囲気がよく伝わる振付と構成。衣装にもこだわり、また掛け声も工夫されている。
4. JK♡	1番はエプロン着用。2番はそのエプロンを脱ぎ高校の制服になる。髪の毛をよく触る、スマートフォンを眺めながら会話する、といった女子高生の特徴をよく表した振付。またカノンやソロ、多様な隊形変化などの工夫もみられる。
5. Va9tion 11	夏のシーンから始まる。男性役1名と彼を取り巻く女性たち。レイや浮き輪、スイカ（工作品）といった夏を連想させる小道具を多用。アクロバットな動きも取り入れている。
6. O・YA・TSU	子ども役とお母さん役に分かれて踊る。子どもを朝起こして準備させご飯を食べさせ…など、日々の生活におけるお母さんの大変さを細かく表している。
7. Yanagi Nursery School	保育者役と園児役に分かれて踊る。午睡、喧嘩などのシーンを入れ、幼児の無邪気さと保育者の仕事内容をよく表している。
8. プロポーズ大作戦	男装した男性役と女性役がペアになり、集団見合いの様子を表す。小花を小道具として用い、告白して結ばれハッピーエンド。
9. ミルフィーユ	全員高校の制服。爽やかなイメージで踊る。ペアを組み換えていく演出が効果的。
10. むすたふぁーず♡	全員パーカーを着用。2番ではフードを被り、一層激しく大きく踊る。怪しい感じがよく出ている。
11. 就活	面接のシーン。「失礼します」の台詞から始まる。面接官役と就職活動中の学生役。パソコン作業や名刺配りの動きをパロディにした振付、隊形移動、方向などあらゆる面で工夫が見られる。3年生が多く、実体験がよく活かされている。
12. ミッキーと7人のミニー	キャラクターもの。可愛らしさがよく研究されており、振付もテーマパークのキャラクターを意識したものに統一されている。
13. JKリターンズ	全員高校の制服。いまどきの派手な女子高生と真面目な女子高生の対比に工夫がみられる。ハイタッチを多用し、楽しい雰囲気を出している。
14. 野菜	小道具に様々な野菜を使用。またそれらの色をした衣装を着て、野菜の世界を作っている。シュールな作品。

た振付を忠実により完成度を高く仕上げてスマートに魅せるグループもあった。受講者に話を聞くと「他のグループは色々と変えて作ってくるだろうから、私たちはその逆を狙ってこの振付を完璧に揃えて踊ることを目指してみました」とのことであった。オリジナリティを求めるに発想の転換が功を奏した例の一つである。

2. 初回後と最終回後での比較

〈踊り・表現および授業全体について〉（表3）

①「自分を思い切り出すことができた」

集団A、Bともに有意な上昇を示し、A：3.66 ± 0.84→4.19 ± 0.66（$p<0.001$）、B：4.34 ± 0.78→4.60 ± 0.55（$p<0.05$）であった。両群とも最終回後には4点を超えており、本教材を通じて、受講者は自己を解放することが出来たといえる。また、それを可能にする場が創生されていたといえる。

②「間違えずに踊ることができた」

集団A、Bともに有意な上昇を示し、A：2.28 ± 1.14→3.60 ± 1.22（$p<0.001$）、B：2.49 ± 1.03→3.97 ± 1.00（$p<0.001$）であった。両群とも初回後には2点台であったが、最終回後には3点台後半へと上昇している。基本の振付では1番と2番は同じ振付であるのに対し、半分創作後には間奏～2番～後奏に当たる部分の振付も増えることから、覚える量としては単純計算で2倍以上になっている筈である。それにも拘らず得点が上昇しているということからも、回数を重ねることで振付を覚えることが出来、受講者の努力が実を結んだといえる。また、教えられた振付ではなく、自分たちで考えた振付と意味のあるシーンが入ったからこそ却って覚えやすくなったのではないかとも推察できる。

③「間違えたかどうかはさておき、楽しく踊ることができた」

集団Aでは有意な上昇を示し、4.55 ± 0.62→4.81 ± 0.49（$p<0.05$）であった。集団Bでは有意な差は認められず、4.89 ± 0.36→4.95 ± 0.21であった。両群とも初回後の時点で既に4.5点以上であり、過去の事例と同様に受講者は「楽しさ」を充分感じることが出来ていることがわかる。そしてまた、楽しさを感じる為には踊りを正確に踊ることが出来るかどうかはさほど問題にはならないということがこの結果からみてとれる。

④「相手の動きを感じ取ろうとした」

集団A、Bともに有意な上昇を示し、A：4.04 ± 0.75→4.40 ± 0.69（$p<0.05$）、B：4.31 ± 0.79→4.63 ± 0.57（$p<0.05$）であった。両群とも初回後から既に4点以上であるが、この教材は二人組で行う踊りをベースに展開されていくタイプのダンスであるので、この結果は想像に難くない。場合によっては振付を覚えることに精一杯で相手のことにまで気を配れない者もいるのではないかと予想したが、最終回後に両群とも評価点が有意に上昇していることから、本教材を通じてより「共に動く」意識が増したといえる。

⑤「一緒に踊った人と、踊りを通じて気持ちが通じ合ったと思う」

集団A、Bともに有意な上昇を示し、A：初回後4.06 ± 0.82→4.62 ± 0.57（$p<0.001$）、B：4.49 ± 0.75→4.74 ± 0.54（$p<0.05$）であった。両群とも初回後から既に4点以上であるが、本教材を行うことにより、更に他者との内面的な繋がりが増したといえる。

⑥「自然と笑顔になっていた」

両群とも有意な差は認められず、集団Aは4.77 ± 0.52→4.69 ± 0.58、集団Bは4.92 ± 0.37→4.91 ±

0.29であった。初回後の段階で両群とも4.7点以上とかなり高い値を示しており、本教材の楽しさを物語っているといえる。また、有意差は認められないものの、若干の下降傾向がみられるのは、発表形式から生じる緊張によるものではないかと推察される。

⑦「踊り終わった後は爽快感を感じた」

集団Aでは有意な差は認められず、4.43 ± 0.71→4.65 ± 0.68であった。集団Bでは有意な上昇を示し、4.59 ± 0.63→4.86 ± 0.35（$p<0.01$）であった。初回後の段階で両群とも4.4点以上と高い値を示しており、アップテンポで仲間と踊ることによって心身の爽快感を覚えることできたのではないかと推察される。

⑧「緊張した」

集団A、Bともに有意な上昇を示し、A：2.94 ± 1.36→3.71 ± 1.45（$p<0.01$）、B：2.43 ± 1.26→3.89 ± 0.68（$p<0.001$）であった。初回では中間発表を行ったが、発表による緊張よりも面白い曲に合わせて面白いダンスを踊ることによる楽しさの方が勝っていたと推察でき、このことから2点台に止まったと思われる。一方、最終回では発表において「うまく踊れるだろうか」「自分たちの発表がうまくいくだろうか」「他のチームの完成度に対して自分たちのものはどうであろうか」といった不安から、また衣装有り・メイク有り・ビデオ撮影有りといった発表会特有の雰囲気から緊張が増したのではないかと推察される。

⑨「恥ずかしかった」

集団A、Bともに有意な上昇を示し、A：3.15 ± 1.12→3.58 ± 1.30（$p<0.05$）、B：2.42 ± 1.25→3.29 ± 0.57（$p<0.001$）であった。⑧「緊張した」と同様に発表会形式により恥ずかしさが増したと考えられる。しかし初回、最終回ともに2～3点台であったことから、恥ずかしさはそれほど強くないといえる。

⑩「達成感が得られた」

集団A、Bともに有意な上昇を示し、A：3.89 ± 0.96→4.67 ± 0.65（$p<0.001$）、B：4.31 ± 0.90→4.85 ± 0.55（$p<0.001$）であった。全身を使って思い切り動いたことによるとともに、仲間と共に授業内外で練習を重ねてきたことによるところが大きいと推察される。

⑪「仲間と協力できた」

集団A、Bともに有意な上昇を示し、A：4.45 ± 0.62→4.87 ± 0.40（$p<0.001$）、B：4.68 ± 0.66→4.88 ± 0.84（$p<0.05$）であった。両群ともに初回の段階から既に4点台であり、良好な人間関係が構築されていたと考えられる。それに加え、チームごとの話し合いや練習、本番を通してその関係はより深まったと推察される。

⑫「表現することは楽しい」

集団Aでは有意な上昇を示し、4.38 ± 0.85→4.73 ± 0.56（$p<0.05$）であった。集団Bでは有意な差は認められず、4.72 ± 0.55→4.88 ± 0.47であった。両群とも初回時に4点台を示しており、創作的な要素を入れる前の段階である「既成の振付を踊る」というダンスでも、ただ踊るだけではなく「表現する」ことを意識できていたといえる。これは本教材の特徴でもあるが、ただリズムに合わせて運動を行うのではなく、振付に台詞やオノマトペ、イメージや固有名詞などの意味づけを施しているためであろうと思われる。

⑬「表現することは難しい」

集団Aでは有意な差は認められず、4.26 ±

表３　初回後と最終回後との比較（集団別）

	集団A n=47			集団B n=65		
	初回	最終回		初回	最終回	
① 自分を思い切り出すことができた	3.66 0.84	4.19 0.66	***	4.34 0.78	4.60 0.55	*
② 間違えずに踊ることができた	2.28 1.14	3.60 1.22	***	2.49 1.03	3.97 1.00	***
③ 間違えたかどうかはさておき、楽しく踊ることができた	4.55 0.62	4.81 0.49	*	4.89 0.36	4.95 0.21	
④ 相手の動きを感じ取ろうとした	4.04 0.75	4.40 0.69	*	4.31 0.79	4.63 0.57	*
⑤ 一緒に踊った人と、踊りを通して気持ちが通じ合ったと思う	4.06 0.82	4.62 0.57	***	4.49 0.75	4.74 0.54	*
⑥ 自然と笑顔になっていた	4.77 0.52	4.69 0.58		4.92 0.37	4.91 0.29	
⑦ 踊り終わった後は爽快感を感じた	4.43 0.71	4.65 0.68		4.59 0.63	4.86 0.35	**
⑧ 緊張した	2.94 1.36	3.71 1.45	**	2.43 1.26	3.89 0.68	***
⑨ 恥ずかしかった	3.15 1.12	3.58 1.30	*	2.42 1.25	3.29 0.57	***
⑩ 達成感が得られた	3.89 0.96	4.67 0.65	***	4.31 0.90	4.85 0.55	***
⑪ 仲間と協力できた	4.45 0.62	4.87 0.40	***	4.68 0.66	4.88 0.84	*
⑫ 表現することは楽しい	4.38 0.85	4.73 0.56	*	4.72 0.55	4.88 0.47	
⑬ 表現することは難しい	4.26 0.82	4.33 0.83		4.37 0.86	4.78 0.41	**
⑭ 表現力が向上した	3.68 0.86	4.17 0.73	**	4.12 0.80	4.66 0.24	***
⑮ 感じたことや考えたことを自分なりに表現できた	3.83 0.87	4.54 0.73	***	4.34 0.78	4.68 0.55	**

※網掛は4点以上の項目　　上段：平均　下段：標準偏差

***p<0.001　**p<0.01　*p<0.05

0.82→4.33±0.83であった。集団Bでは有意な上昇を示し、4.37±0.86→4.78±0.41（p<0.01）であった。両群とも初回、最終回ともに4点以上であったことから、常に表現の難しさを感じていたことがうかがえる。これはもちろんイメージ通りに表現することの難しさを意味していると思われるが、その段階に至る前に「ダンス＝振付を覚える＝表現」であると早合点してしまい、「動きを覚えるのが難しい」「上手に踊ることができない」のような表面的な難しさとして捉えて回答している者もいるのではなかろうかと推察される。

⑭「表現力が向上した」

集団A、Bともに有意な上昇を示し、A：3.68±0.86→4.17±0.73（p<0.01）、B：4.12±0.80→4.66±0.24（p<0.001）であった。表現力の捉え方が受講者によってまちまちであり、「自分たちの作品のテーマに沿った動き方や表し方ができた」ことを指す者もいれば、上記⑬と同様に「ダンスがうまくなった」という表面的な動きの上達のみに着目している者がいることも予想できる。

⑮「感じたことや考えたことを自分なりに表現できた」

集団A、Bともに有意な上昇を示し、A：3.83±0.87→4.54±0.73（p<0.001）、B：4.34±0.78→4.68±0.55（p<0.01）であった。保育者を目指す学生が現場に出る前に、幼稚園教育要領[9]および保育所保育指針[10]における表現領域のねらいの一つである「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」を実際に体験できているかどうかが重要であるが、本教材を通じてこの体験が可能になっていると示唆された。

全15項目中、初回と最終回で有意な差が見られた項目は、集団A、Bともに12項目であった。また、②「間違えずに踊ることが出来た」⑧「緊張した」⑨「恥ずかしかった」の3項目以外の12項目全てで最終回後に4点以上の値を示しており、その中でも特に高い値を示した項目は③「間違えたかどうかはさておき、楽しく踊ることが出来た」（A：4.81、B：4.95）、⑤「一緒に踊った人と、踊りを通して気持ちが通じ合ったと思う」（A：4.62、B：4.74）⑥「自然と笑顔になっていた」（A：4.69、B：4.91）、⑦「踊り終わった後は爽快感を感じた」（A：4.65、B：4.86）、⑩「達成感が得られた」（A：4.67、B：4.85）、⑪「仲間と協力できた」（A：4.87、B：4.88）、⑫「表現することは楽しい」（A：4.73、B：4.88）、⑮「感じたことや考えたことを自分なりに表現できた」（A：4.54、B：4.68）であった。以上より本教材を体験することにより、受講者の自己及び他者に対する意識や気づき、表現に対する意識が本教材及び筆者のねらいに近づく望ましい方向へ変化をみせることが明らかになった。

また、変動係数をみてみると（表4）、他の項目に比べて高い項目は、初回後では集団A、Bともに②「間違えずに踊ることが出来た」（A：50、B：41）、⑧「緊張した」（A：46、B：47）、⑨「恥ずかしかった」（A：36、B：46）の3項目であった。最終回後では集団Aで同様に②「間違えずに踊ることが出来た」（A：34）、⑧「緊張した」（A：39）、⑨「恥ずかしかった」（A：36）の3項目、集団Bでは②「間違えずに踊ることが出来た」（B：26）の1項目であった。以上より、この3項目に関してはばらつき即ち個人差が大きいことがわかる。また、全項目の傾向として初回後よりも最終回後の方が変動係数が下がっていることから、同じ教材を行うことにより全受講者に似たような意識変化がみられ、望ましい効果が期待できると示唆された。

表４　初回後及び最終回後の変動係数

	初回後		最終回後	
	集団A	集団B	集団A	集団B
① 自分を思い切り出すことができた	23	18	16	12
② 間違えずに踊ることができた	50	41	34	26
③ 間違えたかどうかはさておき、楽しく踊ることができた	14	7	10	4
④ 相手の動きを感じ取ろうとした	19	18	16	12
⑤ 一緒に踊った人と、踊りを通して気持ちが通じ合ったと思う	20	17	12	11
⑥ 自然と笑顔になっていた	11	7	12	6
⑦ 踊り終わった後は爽快感を感じた	16	14	15	7
⑧ 緊張した	46	47	39	18
⑨ 恥ずかしかった	36	46	36	17
⑩ 達成感が得られた	25	21	14	11
⑪ 仲間と協力できた	14	14	8	17
⑫ 表現することは楽しい	19	12	12	10
⑬ 表現することは難しい	19	19	19	9
⑭ 表現力が向上した	23	19	18	5
⑮ 感じたことや考えたことを自分なりに表現できた	25	21	21	9

※網掛は他項目と比して高い項目

3. 集団別平均と集団間の差異

〈創作に関して〉

⑯「動きを考えることは難しかった」

両群とも4点以上であった（A：4.04 ± 0.97、B：4.58 ± 0.68）。また、両群間に有意な差が認められた（$p<0.001$）。以上より、両群の受講者にとってダンスを考えることは難しかったが、集団によってその程度には差異があることが明らかになった。

⑰「テーマやイメージなどを意識して創作できた」

両群とも4点以上であった（A：4.27 ± 0.89、B：4.65 ± 0.57）。また、両群間に有意な差が認められた（$p<0.01$）。以上より、両群の受講者はテーマやイメージなどを意識して創作することができたが、集団によってその程度には差異があることが明らかになった。

⑱「動きを工夫する楽しさを感じた」

両群とも4点以上であった（A：4.44 ± 0.57、B：4.63 ± 0.55）。また、両群間に有意な差は認められなかったことから、両群の受講者は動きを工夫する楽しさを充分に感じることができたといえる。

⑲「自分の意見を出すことができた」

両群とも4点以上であった（A：4.06 ± 0.98、B：4.40 ± 0.84）。また、両群間に有意な差が認められた（$p<0.05$）。以上より、両群の受講者は創作・練習期間中に自分の意見を出すことができたが、その程度は集団によって差異があることが明らかになった。

⑳「他の人の意見を受け入れることができた」

両群とも4点以上であった（A：4.77 ± 0.43、B：4.80 ± 0.47）。また、両群間に有意な差は認められなかったことから、両群とも同程度、他の人の意見を受け入れることができたことが明らかになった。

上記⑯⑰⑲より、両群とも動きを考える難しさを感じていながらも、内容を意識した創作ができ、その為の意見交換もできてはいたが、その程度には集団により差異があることが明らかになった。

また、⑲⑳より、他の人の意見を受け入れることは両群ともかなりできており両群間に差異はないが、いざ自分の意見を出すとなると集団によりその程度には差異が生じることが明らかになった。（但し、意見を出さないのは、他の者に遠慮して出さない場合とアイデア自体が自分の中に湧いてこない場合があり、今回の結果からはどちらかは断定できない）

〈発表に関して〉

㉑「発表するのは楽しい」

両群とも4点以上であった（A：4.35 ± 0.74、B：4.78 ± 0.41）。また、両群間に有意な差が認められた（$p<0.001$）。以上より、両群とも受講者は発表することに楽しさを感じたが、集団によってその程度には差異があることが明らかになった。

㉒「発表を見るのは楽しい」

両群とも5点に近い値であった（A：4.92 ± 0.27、B：4.94 ± 0.24）。また、両群間に有意な差は認められなかった。以上より、両群とも受講者は発表を見ることに対して非常に楽しいと感じていることが明らかになった。

㉓「他のグループが何を表現しているのかよく伝わってきた」

両群とも5点に近い値であった（A：4.83 ± 0.38、B：4.82 ± 0.43）。また、両群間に有意な差は認めらなかった。以上より、両群とも他グループの表現が大変よく伝わっていることが明らかになった。

㉔「他の人の動きの中に「その人らしさ」を感じた」

両群とも4点以上であった（A：4.63 ± 0.60、B：4.70 ± 0.55）。また、両群間に有意な差は認められなかった。以上より、両群とも他の人の動きの中に「その人らしさ」を大いに感じていることが明らかになった。

㉕「自分のグループの個性を活かすことができた」

両群とも4点以上であった（A：4.60 ± 0.53、B：4.78 ± 0.41）。また、両群間に有意な差が認められた（$p<0.05$）。以上より、両群とも受講者は個性を活かすことができたが、その程度は集団によって差異があることが明らかになった。

上記㉒㉓㉔から、発表を見る楽しさや他者の表現を読み取る力、個性を感じ取る力に関しては集団による差異はなく、受講者のほとんどが非常に強く楽しさを感じており、また双方向的な表現力を身に付けることができていると示唆された。また、㉑㉕から、発表をする楽しさを大いに感じ、また、個性を活かすこともよくできているが、集団によりその程度には差異があることが明らかになった。

上記⑯から㉕より、両群間に有意な差のある項目は5項目認められ、集団によって意識に差異があることが明らかになった。しかしながら両群とも共通して全項目で4「そう思う」から5「とてもそう思う」の間であることから、創作・発表に関

表５　創作および発表に関する意識調査

	集団Ａ	集団Ｂ	
⑯ 動きを考えることは難しかった	4.04 0.97	4.58 0.68	***
⑰ テーマやイメージなどを意識して創作できた	4.27 0.89	4.65 0.57	**
⑱ 動きを工夫する楽しさを感じた	4.44 0.57	4.63 0.55	
⑲ 自分の意見を出すことができた	4.06 0.98	4.40 0.84	*
⑳ 他の人の意見を受け入れることができた	4.77 0.43	4.80 0.47	
㉑ 発表するのは楽しい	4.35 0.74	4.78 0.41	***
㉒ 発表を見るのは楽しい	4.92 0.27	4.94 0.24	
㉓ 他のグループが何を表現しているのかよく伝わってきた	4.83 0.38	4.82 0.43	
㉔ 他の人の動きの中に「その人らしさ」を感じた	4.63 0.60	4.71 0.55	
㉕ 自分のグループの個性を活かすことができた	4.60 0.53	4.78 0.41	*

※網掛は有意差の無い項目　　上段：平均　　下段：標準偏差

*** $p<0.001$　** $p<0.01$　* $p<0.05$

表６　創作および発表に関する意識調査における変動係数

	集団Ａ	集団Ｂ
⑯ 動きを考えることは難しかった	24	15
⑰ テーマやイメージなどを意識して創作できた	21	12
⑱ 動きを工夫する楽しさを感じた	13	12
⑲ 自分の意見を出すことができた	24	19
⑳ 他の人の意見を受け入れることができた	9	10
㉑ 発表するのは楽しい	17	9
㉒ 発表を見るのは楽しい	5	5
㉓ 他のグループが何を表現しているのかよく伝わってきた	8	9
㉔ 他の人の動きの中に「その人らしさ」を感じた	13	12
㉕ 自分のグループの個性を活かすことができた	12	9

※集団ＡおよびＢで、値の大きい方に網掛をした

して両群の回答はある程度似通っていることが明らかになった。

また、変動係数をみてみると（表6）、集団Aが集団Bに比べて全体的に高いことがわかる。このことから、集団Aの方が個人差が大きいといえる。これは、上述のとおり受講者の学年構成（1、2、3年生混在）が主たる要因の一つではないかと推察できる。（集団Bは1年生のみ）

Ⅳ．まとめ

ダンスの楽しさ・面白さを充分に体験できる教材である「おもしろダンス」を用いて、そこに創作的要素を組み込むことにより、ただ単に楽しいだけでなく様々な学びや気づきが生まれることを期待して調査を行った。その結果、受講者は自分の表現や他者の表現、自己の気づきと他者の理解・コミュニケーションなどに関して、授業のねらいに適った望ましい意識変化をみせた。

③「楽しかった」⑥「笑顔になった」⑦「爽快感を感じた」⑩「達成感が得られた」といった項目の評価上昇に関し、中村（2006）は「現代的なリズムのダンスは『みんなで踊ると一体感がある』が『これは動きの同調による一体感であり、内面的な個の交流の成果は期待し難い」[11]といっているが、本教材はリズムに合わせた踊りではあるものの、創作的要素が多いこと、そして授業初期の段階で笑いの許される場・楽しさの保障される場であるという安心感を得られたことから、意見交流・コミュニケーションの場が自然に形成されていた為に④「相手の動きを感じ取ろうとした」⑤「気持ちが通じ合った」⑪「協力できた」⑲「自分の意見を出せた」⑳「他の人の意見を受け入れた」㉑「その人らしさを感じた」などの内面的な繋がりの増加がみられたのではないかと考えられる。また同時に中村（2006）は「既成の動きの習得学習では全ての生徒の運動技術、体力レベル、好みの個人差に対応することは難しい」[12]といっているが、本教材のように既成の動きと創作的要素を効果的に織り交ぜることにより、②「間違えずに踊れた」⑭「表現力が向上した」㉕「個性を活かせた」のだと考えられる。

高橋（2013）のいうとおり「音楽の選択や振付などすべてを任されゼロから創る活動よりも、一定の振付を習得すべき課題として与え、そこからイメージを膨らませて創作する活動の方が楽しさを感じやす」[13]く、実際に今回、受講者の授業振り返りシートでもそういった類の感想が多くみられ、更には「次は全部自分たちで考えて踊ってみたい」と意欲を燃やす内容の記述も多数みられた。「創れ」「踊れ」と言われなくても本教材を経て自ら「創りたい」「踊りたい」という欲求が芽生えたのは喜ばしい。授業での体験後に「またやりたい」「もっとやりたい」と思えるのであれば、今後授業内外での自主的活動に繋がり、ひいては将来保育現場での積極的な表現活動に繋がることが期待できる。

今後の課題としては、同授業内他単元および他教科との兼ね合いにもよるが、本教材をスタートとして身体表現・創作活動を段階的に学ぶ場を設定し、学生の希望どおり「ゼロからの創作」を楽しみ学ぶ場を提供したいと思う。

註

ここで重要になってくるのが所謂「創作ダンス」ではなく「創作的要素」である。周知の通り創作ダンスに対する学生の評価は低い。その理由としては「つまらない」「難しい」「なにをどうしていいかわからない」等枚挙にいとまがない[14, 15, 16, 17]。これは学生のみならず、指導者からも同様の声が

少なくない[18, 19, 20, 21]。このことから、テーマや動き、構成、音楽、衣装といった創作作品の構成要素の全てを受講者が担うのではなく、既成の面白い振付と与えられた面白い音楽を手掛かりとして、自由に創作的要素を組み込んでいく創作法は大変有効である 。高橋（2013）が「創作ダンスの特性である創造性、独創性を発揮し、自分の思いを表現する体験と、現代的なリズムのダンスの特性の、リズムに乗って楽しく踊り、運動的達成感を得られる体験の両方が、ダンスの不可分な魅力であると考える。この2つを分けて学習体験することで、ダンスの持つ本来の楽しさを知らぬまま、あるいは不完全燃焼の昇華しきれない思いを抱えたままダンスから離れて行くことになりはしないかと危惧するものである」[22]というように、ジャンル分けせずにダンスを扱うことによりダンス本来の楽しさを体験できるし、ましてや幼児にとっては「ダンスはダンス」であり、そこに「創作ダンスだからこうしなければならない」や「リズムダンスだからこうしなければならない」は無いと考える。

参考文献

・高野牧子・小田ひとみ（2002）．線画を題材とした幼児の身体表現　日本保育学会大会発表論文集（55），272-273

・名須川知子・高橋敏之（2006）．保育内容「表現」論　ミネルヴァ書房

引用文献

1　文部科学省（2008）幼稚園教育要領解説

2　厚生労働省（2008）保育所保育指針解説書

3　小林 賢太郎（2014）『僕がコントや演劇のために考えていること』幻冬舎 p.106

4　荒川 御幸　編著（1991）『のびのびパフォーマンス』ひかりのくに p.66

5　小笠原大輔（2014）「おもしろダンス」の教材としての有効性，東京純心女子大学紀要　第 18 号 pp.23-33

6　前掲 5

7　原田純子（2006）舞踊における“感情昇華”の機能に関する考察 ―質問紙調査による量的検討の試み―　大阪女学院大学紀要第 3 号，pp.67-77

8　岡本雅子（2003）創作ダンス研究～リズムから創作へ～　日本保育学会大会発表論文集（56），pp.290-291

9　文部科学省（2008）幼稚園教育要領

10　厚生労働省（2008）保育所保育指針

11　中村 恭子　浦井 孝夫（2006）ダンスの学習内容と楽しさの検討 ―創作ダンスと現代的なリズムのダンスの比較―　順天堂大学スポーツ健康科学研究 第 10 号，pp.65-70

12　前掲 11

13　高橋 美穂子（2013）創作ダンスの指導に関する考察　白鷗大学教育学部論集 7（1），pp.241-259

14　大貫 秀明（1995）「表現」という呪縛：ダンス教育を一考する　日本体育学会大会号（46），p.146

15　前掲 11

16　前掲 13

17　小笠原 大輔（2011）笑えるダンス　女子体育 vol.53　pp.26-31

18　中村 恭子　浦井 孝夫（2005）ダンス領域内の種目採択に影響を及ぼす要因の検討 ―創作ダンスと現代的なリズムのダンスの比較―　順天堂大学スポーツ健康科学研究 第 9 号，pp.11-20

19　中村 恭子（2008）「中学校のダンス男女必修化に対する現場教員の評価と今後の課題」日本体育学会大会予稿集（59）1，p.236

20　宮川 則子　渡邉 伸（2005）「ダンスの初心者指導について」信州大学教育学部紀要 116，pp.103-110

21　茅野 理子（2013）栃木県学校体育におけるダンス指導の現状と課題について ―ダンス必修化に関するアンケート調査から―　宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 36，pp.25-32

22　前掲 13

A practice report on “Omoshiro Dance” which is an educational material for bodily expression in nursery teacher training

Daisuke OGASAWARA

【abstract】

To develop the ability of expressing, which is said to be a necessity for nursery teacher, it is important to experience the joy of expressing oneself and the joy of embracing the expressions of others while in training school.

For this aim, a questionnaire survey was made on how the awareness about one’s own expression and expressions of others; communication, self-awareness and understanding others changed, and about how the participants felt about creating works and presenting them, when using the teaching material “Omoshiro dance” (fun dance), which offers a lot of fun experiences on dance, with many creative elements incorporated into it.

As a conclusion, the survey showed that the participants’s awarenesses on these aspects had changed in desirable directions of the aims of the class, and that they mostly had good feelings about creation and presentation.

【key words】

Omoshiro-Dance, half-creation, nursery teacher training, ability of expressing